

書き手の立場からみた、博士後期課程におけるレビュー論文執筆の意義  
- 博士論文への架け橋 -

大関 浩美（東京大学留学生センター非常勤講師）

本科研プロジェクトの「中核」をなす「レビュー論文執筆」は、2001年度の長友・佐々木ゼミでスタートした。私がちょうど博士後期課程に進学した年であった。私自身は、後期課程進学後の約2年半の間に、レビュー論文を2本執筆し、また、レビュー論文だけを掲載するという画期的な論文集の初の編集作業にも実行委員の一人として携わった。後期課程在籍期間の約半分を、レビュー論文の執筆や論文集に関することに費やしたことになり、思い出深い。

私自身を含め、本プロジェクトのスタート時点で博士後期1年目だった学生は、「後期課程進学後、まずレビュー論文の執筆をする」という新方針の洗礼を受けた一期生である。その一期生の一人として、レビュー論文執筆でスタートを切ったことが、博士論文執筆という博士後期課程における最大の課題の達成にどう結びついたのでかを振り返ってみたい。

#### 1. 博士後期課程1年目におけるレビュー論文執筆の意義

1本目のレビュー論文は、第二言語習得研究での英語・日本語の名詞修飾節を対象とした研究を概観した論文（齋藤 2002）であった。レビュー論文をいつ、どれくらいの時間をかけて書いたかは、本科研のレビュー論文執筆者の間でもそれぞれ異なるだろう。私の場合、1本目のレビュー論文は、博士後期1年目の進学直後から初冬を中心に執筆、冬に投稿、2年目の5月に発行されたレビュー論文集に掲載という過程を辿った。後期課程1年目は、修士論文での研究を数箇所公开发表すること以外には、自分の研究を進めることよりも、レビューを書くために文献を読むことと、レビュー論文を書くことに費やされたと言っていい。

途中、こんなにレビュー論文ばかりに追われていていいのだろうか、自分の研究をさっさと進めたほうがいいのではないかと焦りを感じたことも何度かあった。しかし、レビューを書くという目的で、国内外の膨大な文献を集中的に、また、批判的に読み、さらに、それらを人が読んでわかるようにまとめるという作業を、1年目に徹底的に行なうことにより、当該分野に関する専門性を高め、問題点を整理し、当該分野で何がわかっていて何がわかっていないのか、どのような研究が必要なのかを考えることができ、その後の研究を進めるための強固な土台を築くことができたように思う。

ただし、私の場合、修士論文（齋藤 2001）では複文全体の習得過程を対象としており、博士後期課程に進んだ後に、テーマを名詞修飾節の習得に絞り込んだため、名詞修

飾節(および英語における関係節関連の習得研究)に関する文献を集中的に読んだのは、博士後期課程に進んでからであった。したがって、もともと博士前期課程で自分の専門分野に関する知識を蓄えてきた模範的な大学院生からみれば、後期課程1年目になって文献を読み漁ったという私の例は、特によい例とは言えず、多少スタートの遅れた例かもしれない。

いずれにせよ、当該分野の最新の研究までを網羅的に把握するという、博士論文を書くための基本の基本となる作業を博士後期1年目に集中的に行なえたことは、非常に有意義であったと思う。そして、また、実利的な面でも、この1本目のレビュー論文の多くの部分が博士論文の先行研究を扱う章に生かされており、実際に博士論文執筆の段になって、労力および時間の大きな節約にもなった。

## 2. 2本目のレビュー論文執筆の意義

さて、博士後期2年目の5月に、1冊目のレビュー論文集が発行された。前述のように、1本目のレビューを終え、自分の専門とする名詞修飾節の習得研究に関しては、英語などの言語を対象としたものも含め、かなり把握することができ、「今何が明らかになっていないか」ということも、自分なりに絞り込まれてきた。そこで、博士2年目の秋から執筆を始めた2本目のレビュー論文(大関2003)では、1本目にレビューした内容からひとつのトピックを取り上げ、それに関する理論的な問題を論じることにした。

ここまでは、非常に順風満帆な展開に見えるであろうが、実は、ここから先の、この2本目のレビューがどう博士論文に結びついたかというのは、私の場合は一筋縄ではいかない展開になっており、「2本目のレビュー論文を書く意義」としては、一般化できる経験ではないかもしれない。

2本以上のレビューを書く場合、おのずと1本目は先行研究を網羅的に概観した論文となり、2本目以降は方法論や理論などに踏み込んだものになると思われ、2本目以降のレビューに書いたことは、直接的に自らの研究方法や研究デザインに結びつくのが理想的だろう。しかし、私の場合、2本目のレビュー論文に書いたことは、博士論文での研究方法等には直接的には取り入れなかったのである。

このレビュー論文では、名詞修飾節の難易を説明するいくつかの理論を検討し、多くの実験研究の結果を概観しながら、名詞修飾節の難易には多くの要因が関わっていることを論じ、しっかりと変数をコントロールすることが必要であるとまとめた。しかし、最終的に博士論文を書くために選んだ研究方法は、実験研究ではなく、子どもや学習者の発話データを使用し、習得プロセスを記述・分析するという中間言語分析の原点とも言える方法に戻ることであった。

当初は、自らの博士論文でも何らかの実験的な研究をする計画で、2本目のレビュー論文を書き始めた。レビューする分野をL1習得研究にも広げ、さらに心理言語学の分野における文処理過程を調べる実験、脳波を使った実験にまでも目を通した。新たな文

献を読みながらまとめていくなかで、名詞修飾節の難易には様々な要因が影響していること、関係節の難易を検証するにはそれらの要因の注意深いコントロールが必要であることがわかり、文献を読むのも論文を書くのも、非常にエキサイティングな過程であった。しかし、それと同時に、結局はどのような要因が影響するのかはまだわからないう現況では、思いもよらない要因が難易を左右する変数になっているかもしれない。したがって、現時点で生半可に要因をコントロールした実験を行なったところで真実が得られるのだろうかという疑問も、ふつふつと湧いてきた。これまでの日本語の名詞修飾節に関する実験研究は、見事にばらばらな結果になっており、一致した結論は全く得られていないが、今の段階で実験を繰り返しても、また「ばらばらな結果」をひとつ増やすだけなのではないか。まさに、読めば読むほど、また、書けば書くほど出口が見えなくなり、深みにはまるという状態である。

この深みにはまった状態から、最終的に、発話データで習得プロセスをみるという原点に戻らせたものは、1本の論文であった。英語を母語とする子どもの関係節の使用をコーパスを用いて詳細に分析した論文である (Diessel & Tomasello 2000)。そこに書かれていたのは、実際に子どもが習得の初期に使用していた形式は、それまで多くの実験で刺激文として使われていたものとは全く異なるものであること、テスト文に使われていたような文を、子どもはほとんど使っていないということであった。そして、子どもたちが関係節をどのように使い始めていくかが、明快に描き出されていた。もともと、2本目のレビューを書き始める少し前に読んだ論文であるが、レビューを書きながら大きな疑問にぶつかったときに読み直したことにより、やっと出口が見えた気がした。

まず必要なのは、現象をみること、事実をみることではないか。実際にどのようなものが使われているのか、それがまだ何もわかっていないままに、理論に理論を重ね、要因をコントロールし、自分の検証したい理論に基づいた変数のみに絞った文での難易を検証することで、そこから何が見えるのだろうか。これが、多くの文献をレビューし問題点を整理し、大きな問題がみえてきたときに、もう一度この論文を眺めていて気がついたことである。まずは、子どもや学習者がどのような言語体系をどのようなプロセスで作っていくのかということをも原点に戻ってきちんと記述し、明らかにしないことには、それなしで机上の実験を重ねても、砂上の楼閣にしかならないのではないか。もちろん、事実や現象をみる段階がすでに踏まれている分野もあり、それらの分野では実証的な研究により多くの成果が出ているが、日本語の名詞修飾節に関しては、その部分がまだ欠けている。今最も必要な研究は、まず事実をみることだと、気がついた。

このようなプロセスを経て、博士後期課程2年目の最後に、2本目のレビューを書いている途中で、博士論文の研究計画をまとめた。日本語を母語とする子ども、および、第二言語日本語学習者の発話コーパスを使用し、子どもや学習者がどのような言語体系を作っていくのかを、大規模にかつ包括的に記述・分析し、英語を対象とした結果と比較するというものである (もちろん、実際には、Diessel & Tomasello 2000 の結果を

見て、直感的に日本語ではかなり異なる結果が得られそうだという予想がつき、発表価値のある研究になるだろうという見込みが持てたことも、このような計画を立てたひとつの理由ではある)。一方で、レビュー論文では、書き進めていたとおり、名詞修飾節の難易にはさまざまな要因が影響するということをまとめ、2本目のレビュー論文も書き終えた。回り道ではあったが、2本目のレビューを書くプロセスの中で、やっと博士論文の方向性が見えた。また、2本目のレビューを書く過程で読んだ心理言語学系の文献などから得た知識は、博士論文での研究結果を考察し議論していくうえでの、非常に重要な基礎知識となった。

このように、2本目のレビューについては、直接博士論文のひとつの章に収められるものにはならなかったが、別の形で博士論文執筆のための重要なプロセスとなったのだと思う。

### 3. レビュー論文をゼミで発表することの意義

レビュー論文執筆に関連し、私たちが経験したもうひとつの大きな試練は、ゼミでの発表であった。ゼミでは、レビュー論文を書き進める段階で何度か発表を行なったが、自分がレビューした内容、つまり、自分が専門としている分野の先行研究に関して、さまざまな厳しい質問を受けた。ここには、自分自身の研究について質問されることとはまったく異なるプレッシャーがある。研究発表の場合、ゼミで発表するものは進行中の研究であるから、ある程度は穴があってもやむをえないが、自分の専門分野に関する知識については、そうはいかない。あれもこれもわからず、しどろもどろになることなど許されることではなく、自らが専門としている分野に関する知識が欠けていたり、それまでの研究を把握しきれていないなどということは、「ドクターコースの学生」(つまり、専門家のヒヨコ)として恥をさらすことになる。自分の研究を発表すること以上に、「ドクターコースの学生」としての資質を問われる非常に厳しい場だと感じた。しかし、そのような厳しい場を設けられてこそ、ゼミという内輪の場での発表であっても、「まあ、内輪だから、この辺でいいか」とならず、その発表に向けて必死の努力をすることができたのだと思う。多少、「スポ根ドラマ」めいて聞こえるかもしれないが、実際、100本近くにもなる文献を1本のレビュー論文にまとめるというのは、かなり気合と根性のいるプロセスである。私自身は、締め切りが迫らないと気合が入らない性格であるため、このような場がなく、ひとりコツコツと書くだけであつたら、だらだらと時間ばかりかかってしまい、とても書き上げられなかったかもしれないと思う。

### 4. 「レビュー論文を書いた」ということの意味面での意義

最後に、精神論めいた振り返りもひとつしておきたい。先行研究を一段高いところから見渡し、交通整理をし、問題点を洗い出していくという論文を書くことにより、自分が結構専門家になったような気持ちが持てるというのも、レビュー論文を書くことの大

きなメリットだと思う。また、レビューを書くために、文献を探しに探し、その文献の引用文献から、さらに芋づる式に文献を掘り当てるという作業を行なったことで、「とにかく名詞修飾節の習得研究に関しては、私の把握していない研究はほとんどない」という自信と安心感が生まれ、自分のやろうとしている研究が「新しい」ものであり、「価値があり」「おもしろい」ということに（かなり自画自賛的ではあるが）自信を持つことができた。自分が世に出そうとしているものが、「すばらしい」ものであり、「おもしろい」ものであると（かなりの部分は錯覚であっても）思い込んで書けなければ、博士論文研究を進めていくのはあまりにも苦しいだろう。「レビュー論文」なるものを取りあえず執筆し世に出したということが、研究を進めていく原動力になってくれたように思う。

## 5. おわりに

2本のレビュー執筆は、ここまで述べたような、それぞれ異なった形で博士論文につながった。博士論文は書くこと自体も苦しい道のりだったが、何を書くのかを決めるまでが、書く過程そのものよりも、さらに苦しい道のりであったと思う。自分の中で問題点が明らかになり、今どのような研究が必要とされているのか、そして自分は何がしたいのか、それらが見えるまでは、行きつ戻りつし、森の中を彷徨うような状態が続く。博士後期課程の最初にレビュー論文の執筆に心血を注ぐということは、苦しい回り道のようにも見えるが、実は、見えないままに見切り発車し闇雲に研究に邁進していくよりも、森から抜け出すための近道であるように思う。

## 参考文献

- 大関浩美（2003）「なにが関係節習得の難易を決めるのか：研究の動向および日本語習得研究への示唆」『第二言語習得・教育の研究最前線 2003年版』日本言語文化学会研究会 32-50.
- 齋藤（大関）浩美（2001）「初級日本語学習者の複文構造の習得過程に関する縦断的研究」お茶の水女子大学 平成12年度修士論文
- 齋藤（大関）浩美（2002）「連体修飾節の習得に関する研究の動向」『第二言語習得・教育の研究最前線—あすの日本語教育への道しるべ—』日本言語文化学会研究会 45-69.
- Diessel, H. & Tomasello, M. (2000) The development of relative clauses in spontaneous child speech, *Cognitive Linguistics*, 11, 131-151.